

先史時代の“子ども”

忽那敬三（明治大学博物館学芸員）

はじめに

これまで、妊娠している様子を表した土偶や、子どもの足形をつけて焼き上げた土板、大人とともに埋葬された子どもの骨など、子どもに関する考古学的な資料が存在することはある程度知られていた。しかし、数が限られている上に、大人と共用した道具が多かったと考えられることや骨自体が小さく残りにくいなど制約が多いために、研究対象として扱われることが少なかった。この傾向は、大人が文字で記録を残すことから文献史学でも同様であり、歴史学そのものにおいて子どもに関する研究が低調であったといえる。

こうした状況に変化が現れたのが1980年代後半であり、縄文時代の資料を中心に子ども関連遺物について取り上げた春成秀爾の論考（春成1985）や、中世絵画から子どもの登場を考えた黒田日出男の研究（黒田1989）などがある。その後、縄文時代の子どもの埋葬のあり方や副葬品を詳細に分析した山田康弘が、成人儀礼など年齢階梯を中心として縄文時代人の一生涯のサイクルであるライフヒストリーモデルを示したほか（山田1997）、近世の事例から谷川章雄が江戸の胞衣納めや乳幼児の埋葬の実態について明らかにするなど（谷川2001）、各時代において発掘された資料をもとに子どもの埋葬方法や社会における位置づけを考える研究が行われ始めた。一方、文献史学においても中世の子どもについて扱った斉藤研一の研究（斉藤2003）や、平安期の貴族層の成長儀礼に注目した服藤早苗の研究など（服藤2004）があり、2000年以降は文献・考古の枠を問わず歴史学分野全体で子どもが注目され始めているといえる。同時に未だ手つかずの部分も多く、今後さらなる研究の進展が望まれる分野でもある。

本稿では、時代ごとに議論が進められがちであった子ども関係の遺物について通史的に概観することで、各時期における子どもの社会的な位置づけがどのように変化したのかを考える。なお、今回は旧石器時代から古代（奈良時代）までを扱う。

多産多死の時代

古人骨の研究によれば、先史時代の離乳年齢は2～3年と推定され、1人の女性が出産する人数は4～5人程度であったという（片山1990）。また、遺跡数や文献から試算された日本列島の人口推移では、縄文時代は早期の2万人以降概ね8～16万人で、最も人口が多い中期でも26万人止まりである（鈴木1988、鬼頭2000）。現代よりも多く出産しているながら増加が頭打ちなのは、それだけ多くの子どもが幼いうちに亡くなっていたためと考えられる。稲作が導入され安定した食料獲得が可能となった弥生時代には59万人に達し、8世紀初頭に451万人になったと推計されているが、江戸時代の例では死産率が10～15%、満1歳までの死亡率が20%という記録があることから（速水2002）、医療が発達する近代まで「多産多死」の時代であったことが窺える。先史時代の子どもたちは、大人になるまで現代よりはるかに困難な環境を生き抜かねばならなかったのである。

また、母親にも出産時の危険が伴った。縄文時代の死亡年齢のピークは30代以降であるが、女性は10代後半から20代まで下がることから、出産時に亡くなる女性の割合が高かった可能性が指摘されている（森山2002）。古墳時代末の事例でも男性が35歳、女性が25歳と10歳近くも死亡年齢のピーク差があることから（千葉県市宿横穴墓群、小高2003）、同様の傾向があったことがわかる。出産、そして集団の将来を支える子どもの成長は、先史時代の人々にとって困難かつ重要な問題だったのである。

では、次にこうした背景を踏まえた上で各時代の資料を概観し、それぞれの時代における子どもの位置づけを探ることにしよう。

旧石器時代の子ども

12,000年前以前の日本列島は旧石器時代にあたるが、土壌が酸性であるため石器以外の遺物がほとんど残らず、手がかりが非常に少ない。人骨自体の出土例



写真1：妊娠の姿を表した土偶（江原台遺跡出土 明治大学博物館提供）

もわずかである。そのうち、沖縄県山下町第1洞穴から出土した小児骨は32,000年前のものと考えられており、現在列島で最古の人骨とされている資料である。このほか15,000年前頃とされる沖縄県下地原洞穴出土の乳児骨があるが、いずれも動物の骨などが同時に出土しており詳細な埋葬状況はわかっていない。

一方、世界の事例では、約30万～3万年前にヨーロッパを中心に分布していたネアンデルタール人は、子どもを埋葬し副葬品を供えていた例があり、旧石器時代の日本列島でも同様な例が存在した可能性がある。

縄文時代の子ども

縄文時代になると、子どもに関する資料が種類・量ともに多くなる。縄文時代には土器を使用し始めたが、器以外に祭祀用の造形物も土を焼いて作るようになる。最も早い段階で現れるのが土偶と、子どもの手や足の形を土板につけた手形・足形付土製品だ。まず土偶は、大きく膨らんだ乳房と腹、出産前後に現れることがある正中線を描く妊娠の姿を表したもの（千葉県江原台遺跡、写真1）、さらに股の間から産児の一部と思われるものがのぞく出産シーンを表したもの（山梨県釈迦堂遺跡）、横座りの姿勢で子を胸に抱き子育ての様子を表したもの（東京都宮田遺跡）など多彩である。さらに、手形・足形付土製品は北海道・東北を中心に見られるもので、当初は大人の墓に入れられる事例が多いことから子よりも先に亡くなった親の墓に副葬品として納められたと考えられる。北海道垣ノ島A遺跡では、国内最多の17点が出土しているが、大小様々なサイズがあり、きょうだい等のものであるとみられる（写真2）。

また、祭祀に関連するものとして出産の状態を表したとみられる土器（山梨県津金御所前遺跡）や、出産時に出る胎盤（胞衣）を土器に入れて住居内や集落の中に埋めたと推測されるもの（埋甕）などもある。後者は、胎盤自体は分解してしまうため中に何も残存し



写真2：手形・足形付土製品（垣ノ島A遺跡出土 函館市蔵）

ていないが、文献や出土資料で知られる江戸時代の胞衣納めの事例と類似していることから、同種のものと考えられている。

また、変わったものとして子どもが握った指の跡が残る粘土塊（山梨県釈迦堂遺跡）や歯で噛んだ跡が残る粘土塊（北海道蛇内遺跡）などもある。いずれも被熱しており、土器作りの場で子どもが手遊びしたものが混入したとみられ、親たちが土器作りをしている傍らで子どもたちが遊んでいた情景を想起させる。

このほか、人骨は全国で480例余りにのぼる。それらを分析した山田康弘によれば、新生児には日常用の土器が棺として使われ、幼児期以降は大人と同じ棺や埋葬方法がとられ副葬品を持ったり大人と合葬される場合があるなど、埋葬の上で年齢別に区分していたという（山田1997）。新生児の土器の棺だけをまとめる例もあるなど、年齢で区分する意識が強く働いていたことを窺わせる。子どもの埋葬に土器の棺を用いる事例は日本の近世や紀元前の東アジアやヨーロッパでもみられ（忽那2004）、普遍的な習慣であったようだ。

以上のように、縄文時代は子どもの痕跡を残す資料が非常に多い。大人と子どもで埋葬に区別があるなど、子どもを一定の年齢層としてまとめて把握する考え方の萌芽がみられることに加え、他の時代よりも妊娠・出産に関する資料が目立ち、それらをいかに大切なものとしてとらえていたかがわかる。



写真3：水田に残された子どもの足跡
(石膏型、垂柳遺跡出土 青森県埋蔵文化財調査センター蔵)

弥生時代の子ども

弥生時代では、一転して子どもに関係する資料が減る。特に祭祀的な資料は皆無である。一方で、社会の変化を表す場面で子どもの痕跡がみられる。

まず、弥生時代には稲作が九州から東日本へと拡大していくが、水田に足跡が残ることがある。大人の足跡が主であるが、なかには子どもの足跡も含まれる(青森県垂柳遺跡、写真3)。古代では口分田が既に6歳から支給されており、除草や収穫は子どもでも十分可能な作業であることから、大人とともに労働に参加していたのであろう。

また、弥生時代には富の収奪や稲作用地の確保をめぐる戦争が始まったと考えられているが、鳥取県青谷上寺地遺跡から出土した約100体の殺傷人骨の中には10歳程の少女のものも含まれており、大人だけでなく子どもも戦火に巻き込まれていたことを示している。

埋葬では土器を棺とする事例が目立つ。さらにこの時代は権力者が登場し副葬品に貧富の差が反映され始めるが、碧玉製管玉の首飾りが副葬された子どもの墓などもあり(鳥取県長瀬高浜遺跡)、子どもにも階層差が現れる時期である。

古墳時代の子ども

権力者によって古墳が築かれるようになると、子どもの墓は古墳の隅や古墳の溝または溝の外に葬られる例が目立ち、大人とは差がある。しかも、棺は土器や埴輪を組み合わせた転用の棺が主体であることから、区別する意識があるとみてよい。古墳時代の水田でも子どもの足跡があるが、殺傷人骨はない。このほか古墳の上に並べられた人物埴輪の中には、授乳するもの



写真4：授乳する女子埴輪
(黄金塚古墳出土、ひたちなか市蔵
明治大学博物館提供)

(茨城県黄金塚古墳、写真4) や子を背負うものなど子育てを表現したものがあり、当時の様子をわずかに知ることができる。

このように、弥生・古墳時代は子どもに関する資料が少なく、特に妊娠・出産にまつわるものがない。埋葬に類するものもほとんどなく、縄文時代と大きく異なる。弥生時代の大幅な人口増加は稲作により食料の安定確保が可能になり亡くなる子どもが減ったことが要因であり、それが妊娠・出産に対する意識に変化を及ぼした可能性がある。

また、この時代は階層差の芽生えや稲作や戦争等、社会の変化に子どもが巻き込まれており、特に稲作では労働力として期待される「小さな大人」として扱われ始めていたとみられる。墓では区別があるが、労働や戦いでは大人との区別が曖昧になり始めており、子どもに関わる資料の減少は、そうした子ども観の変化と密接に関連しているのではないかと考えられるのである。

古代の子ども

古代では、子どもの資料が再び増加する。須恵器の碗や壺に銭や筆、墨等を入れて蓋をし、地中に埋納する例が平城京をはじめ本州の地方政庁跡等で現れるが(写真5)、これらは中世の文献にみられる胞衣埋納と同じ方法をとっており、同種の祭祀であると考えられる(水野1984)。胞衣埋納のまつりは弥生時代に一度途切れるが、平安期の医学書に銭は土地代、長寿、食に困らないためといった意味があると記されており、道教や墓用の土地を買う習慣に通じることから(田中1996)、大陸の影響のもとに胞衣埋納のまつりが再び出現したと考えることができる。

また、独楽、サイコロなどの玩具が初めて登場する。中には、竹トンボのプロペラ部分と全く同じ構造で大きさも類似する木トンボなどもある。こうした玩具類は大人が使い始めたものだが、構造が単純で複製も容



写真5：平城京出土の袍衣壺と中に入っていた墨・筆
(奈良文化財研究所提供)

易であり、中世や近世では大人と子どもの遊びの内容にそれほど差がないことから、子どもが使用した可能性は十分にあるだろう。

さらに注目されるのは、この時期に初めて子ども用品が出現する点である。平城京左京一条三坊出土の全長約13.5cmの小さな下駄は、足の指の付け根とかかとの部分がへこみ、歯も磨り減り、実際に使用したことがわかる資料である。下駄は古墳時代に既に存在するが、子ども用のものはない。こうした子ども用の道具が作られた状況は、玩具の登場とも合わせ、子どもを層として新たに認識し始めていたことを示唆しよう。

この種の遺物が近畿の宮都と地方政庁に限られ、さらに玩具や袍衣埋納が大陸系であることを考えれば、新たな子ども観はそうした情報や道具を入手できる立場であった都市部で生活する役人層・貴族層以上のみ生じたもので、「小さい大人」とは異なり、大人になるまでの準備期間としての「子ども」という存在が生まれたとみられるのである。

おわりに

以上のように、子どもに関連する遺物は縄文時代にすでに出現しており、出産や成長の無事を祈るための道具など誕生と成長への切実な思いが感じられる。埋葬における大人と子どもの区分は明瞭であるが、弥生時代になると子どもに関する資料が減り、労働参加の低年齢化が進むにつれ子どもと大人区分は曖昧になり、「小さな大人」として扱われる。やがて古代になると都市部の役人・貴族以上の層で大人になる前の存在としての新たな子ども観が生じ、成長を願い大切に扱われる子ども層が再び現れる。考古学の視点から考えると、社会における子どもの位置づけは時代によって異なっており、大人を含めた社会全体の変化が大きく影響していると考えられるのである。

冒頭で述べたように、遺物の中における子ども関連資料の数は非常に少なく、また大人と共用する「お下がり」など、認識されにくいものも多い。考古学から子どもを考えることには常に困難が伴うが、文字記録が残らない時代や階層の様相を明らかにできるという利点もある。考古学による子ども研究は未だ緒に就いたばかりであり、今回紹介した内容は概要に過ぎないが、今後さらなる研究が求められると同時に新たな成果が期待できる分野であることをご理解いただければ幸いである。

また、本稿の内容を宮崎県延岡市の小学校で授業を行った際には多産多死についての反響が大きく、「出産時にそれほど危険が伴うとは知らなかった」「母親に感謝したい」「昔の子どもの死亡率の高さに驚いた」「今無事に生きている自分の命を大切にしたい」という感想が多数寄せられた。子どもをめぐる事件や命の重さについて考えさせられることが多い現代において、こうした点にも歴史を研究し、学ぶ意味の一つがあるのではないだろうか。

本稿を成すにあたり、写真の使用について以下の方々にお世話になりました。文末ながら記して謝意を表します。阿部千春・石井篤・白鳥文雄（敬称略、50音順）

<主要参考文献>

- 阿部千春 2002 「垣ノ島 A 遺跡の足形付土版」『考古学ジャーナル』490号 ニュー・サイエンス社
- 井上貴央 2006 「傷つけられた子供たち」『青谷の骨の物語』日本海新聞 8月27日
- 忽那敬三 2006 『掘り出された<子ども>の歴史』明治大学博物館
- 黒田日出男 1989 『絵巻 子どもの登場』河出書房新社
- 小高幸男 2003 「市宿横穴墓群」『千葉県の歴史 資料編 考古2 (弥生・古墳時代)』(財)千葉県史料研究財団
- 鈴木公雄 1988 『考古学入門』(財)東京大学出版会
- 谷川章雄 2001 「江戸の袍衣納めと乳幼児の葬法」『母性と父性の人間科学』コロナ社
- 馬場悠男 2001 「日本の更新世人骨」『日本人はるかな旅展』国立科学博物館・NHK・NHKプロモーション
- 春成秀爾 1985 「子供の考古学」『歴博』第10号 国立歴史民俗博物館
- 服藤早苗 2004 『平安王朝の子どもたち』吉川弘文館
- 水野正好 2014 『想著籙記 壹叢』『奈良大学紀要』第13号 奈良大学
- 森山茂樹 2002 「無文字社会の子ども」『日本子ども史』森山茂樹・中江和恵編 平凡社
- 山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第4号 日本考古学協会

*各報文は紙数の都合で割愛した